

## 第三十二回研究発表会発表要旨

### 萬葉集一一二四番歌

#### 「小騾」の訓みをめぐって

大浜 智代

佐保川さほがわ 小騾せろちどり 夜三更よたちて 爾音聞者なごみきは 宿不難いねぞなく 爾

《校本萬葉集の記述》  
佐保河爾さほがわに 小騾千鳥せろちどり 夜三更而よたちて 爾音聞者なごみきは 宿不難爾いねぞなく

当該歌二句目の「小騾」の部分で西本願寺本萬葉集では「サワドル」と訓んでいるのに対し、校本萬葉集の記述には「アソフ」とある。

澤瀉久孝氏の『萬葉集注釋』では「サワドル」と訓んでいるが、その中で、「古義には中山嚴水の説として、サワドルと訓べきにや、サワドルは難によみて、千鳥には例なけれど、しかよむまじきにもあらず」とある。

そこで今回は「小騾」の訓み、またはその部分の表現の「小騾」の訓みについて現在まで様々な諸説があったが、調査した結果そのどれもふさわしくないように筆者には思われる。

よって「小騾」の訓みかとされてきた例を調査し、この部分の訓みについて調査した。

萬葉集中で「サワドル」と訓まれているものは一例しかなく「ギシ」が「サワドル」と訓まれている。「アソフ」と訓まれている例は全部で三十例あったが、そのどれも人間が花をかざして遊んだり、まかり出でて遊んだりしているものばかりで、鳥が遊んでいるとされるものはわずか一例しかなかった。

現在の図鑑でチドリチドリの生態を見ると、動きは「両足を交互に独活貸して歩いたり走ったりする。実によく動きよく走る。」とある。

この動きを数羽でしていたら追いかけてこをして遊んでいるように見ることも可能である。しかし、このような千鳥の様子は激しく、落ち着きのない様子であるが、萬葉集中の「アソフ」とされている歌を見てみると、どれも静かに遊んでおり、騒がしく動き回って遊ぶというものではないと思う。また、鳥が遊んでいるという表現があまりにも少ないので、この「アソフ」という表現もまた当該歌には適していないと考えた。

以上の考察から現時点で「小騾」の訓みとして最も可能性のありそうな「サワク」と「シバナク」の二つの表現に絞って考察を進める。

図鑑で「サワク」と「シバナク」鳥の生態を見てみると、両者には明確な違いが見られた。

「サワク」鳥はどれも70〜100センチの大型の鳥で、「シバナク」鳥は20センチ前後の小鳥であった。鳴声を見てみると、さえずるようには鳴き、どんなに大きな声で鳴いても「サワク」という表現にはあてはまりそうになく、「細かな声でせわしく鳴き続ける」や「谷渡

りと呼ばれるケキヨケキヨと長く鳴く声」などはまさに「シバナク」という表現に当てはまるのではないか。

そこで当該歌の千鳥はどうであろう。17センチと小鳥で、ピツピツと連呼する。このように生態的に見ると千鳥は「サワク」に完全にあてはまらなく、「シバナク」のほうが適していた。

萬葉集中の「シバナク」には「數鳴」という万葉仮名が当てられ、「小驟」を「シバナク」と訓むには「動」字を調べる必要がありと思ひ調査した。「動」は左の古辞書の記述にも見られるように、「サワガシ」という意味を含んでいる。

当該の「驟」は一字で「サワク」と訓めるのでこのことで「驟」と「動」がつながる。仮に「動」を「ナク」と訓めれば、また、「小」を「シバ」と訓む事を証明できれば「小驟」は「シバナク」と訓む事ができる。

古辞書などを調査した結果、「ナク」は「サヘツル」と訓め、「サヘツル」の中には「サワク」や「カマヒスシ」と訓めるものがあり、これにより「動」字の訓みの中の「サハカシ」とつながる。

そして注目すべき点は、観智院本類聚名義抄の中の「サワク」の記述の「鳥群鳴」である。このことから、「驟」と「動」がつながり、「驟」は「ナク」と読むことができる。

「数」は「シバシバ」と訓めることがわかっている。色葉字類抄の「少」の字は「シハシ」と訓める。観智院本類聚名義抄の記述によると、「少」と「小」は「スクナシ」「スコシ」という意で共通している。このことから、「小」の字は「シバシバ」と訓むことが出来る。

従來說においては「小」字は、訓には直接的には関わらず、ほと

んど意味がなく、ただ添えられているだけであるというような解釈がなされることが多いようであるが、もし「小驟」と訓むことができ、この「小」字を、「シマシ・シマラク」という訓などから「シバ」を引き出すものとして加えられるものであると捉えることができるならば、この「小」字は、明確な意味があつて加えられたことになる。

従來說のように訓んだ場合、この「小」字を訓にうまく生かすことができないため、この「小」字がなぜここに加えられたのかという点について明確な理由を指摘することが困難なのではないかと思うが、小論のように「シバナク」と訓んで、この「小」字を「シバ」に対応するものと見ることができれば、この「小」字についても「シバ」と訓むために必要であつたから加えられたという、至極当然の帰結を得ることが出来る。

表記に表われている以上、やはり、無意味な者として処理する前にまずは、その表記がなされた意図を読み取れるような訓みかたをした方がよいのではないだろうか。

このように考えて当該箇所は「シバナク」と訓もうと思う。以上のことから当該歌を改調すると

佐保川さくわがわに 小驟こぞらちどり千鳥ちどり 夜三更よくたちて而な 尔音なんがこえまきは聞者いねわなくに 宿不難いねわなくに 尔